

## ソーシャルワーカーとカウンセラーの専門性について

## －新聞記事の記述内容における比較－

○ 同志社大学大学院社会学研究科 博士後期課程 杉田 貴行 (008282)  
ソーシャルワーカー, カウンセラー, 専門性

### 1. 研究目的

本研究では、ソーシャルワーカーに必要とされる専門性について明らかにしようとするものである。具体的に、過去の新聞記事において、それぞれの職種の専門性に関する記述内容を確認し、カウンセラーとの比較を実施した上で、ソーシャルワーカーの専門性について検討した。

### 2. 研究の視点および方法

本調査では、全国紙である毎日新聞を取り上げ、1995年3月14日－2015年4月5日までの15年間を対象期間とした。毎日新聞のデジタル版ホームページの検索機能で（「ソーシャルワーカー or 社会福祉士」and「カウンセラー or 臨床心理士」）という言葉で検索した。その結果254件の記事が該当した。

次に分析方法としては、Berelson や Krippendorff の内容分析等を参考に、内容分析的手法にて、ソーシャルワーカー（社会福祉士、以下 SW）やカウンセラー（臨床心理士、以下 CP）の機能や役割などを含む専門性に言及した新聞記事の記述内容を記事単位で整理した。記述内容を整理した結果、それぞれの専門性に直接言及していると思われる記事を41件抽出した。

最終的に、デジタル新聞記事の記述内容に見られる SW の専門性について、CP との比較において考察した。

### 3. 倫理的配慮

本研究は、公刊された新聞記事を二次的データとして引用することにより実施し、データとして利用した。記事に関しては日本社会福祉学会研究倫理指針「学会発表」の規定を順守した。

### 4. 研究結果

本研究は、すでに述べた41件の記事を分析対象として分析するものであるが、ここではいくつかの具体例を取り上げ、紹介することにする。

例えば、1997.10.02の記事では「社会的不利にはソーシャルワーカーやケースワーカーが分担して対応する。心の問題には臨床心理士がいる」とある。

2007.01.24の記事では「全国の公立中学校には現在、国の補助でスクールカウンセラーを原則1人ずつ配置している。しかし、心の問題が専門の臨床心理士が中心のため、家庭内の問題には対応できないとの指摘が学校現場などから出ていた。一方、S S Wは親を含めた『環境』を重視。経済的理由で養育を放棄した親が生活保護などの福祉サービスを受けられるよう手助けしたり、学校での問題に親の虐待が関係していないかなどの情報収集も行う」と紹介されている。

2010.09.03の記事では「スクールソーシャルワーカーは、文部科学省が08年度から全国で導入した。小中学校には、臨床心理に詳しいスクールカウンセラーが配置され、個々の子供の相談に当たるが、スクールソーシャルワーカーは背景にある社会的な要因に目を向ける」とある。

2010.09.12の記事では「山野教授によると、その結果、本来は学校や家庭、関係機関を動き回っているはずのS S Wが、待ちの姿勢になっている。学校はスクールカウンセラーのイメージで、校内に相談室を設けて相談者を連れてくる。S S W自身も『おかしいな』と思っけていても発言できないでいるという」と述べられている。

2012.09.19の記事では「児童生徒のストレスなどに対処するスクールカウンセラーや外部機関や家庭と連携するスクールソーシャルワーカーを増員・拡充する」とある。

2013.05.25の記事は「不登校、暴力行為、いじめなど学校が抱える問題に対し、児童相談所、警察などの機関と連携したり、家庭環境を改善したりしながら解決を図る。スクールカウンセラー（S C）が子供の心のケアが中心なのに対し、S S Wは子供を取り巻く環境を改善することに主眼を置く。現在全国で約700人が活動しているとされるが、人数はS Cの約10分の1」との紹介がなされている。

## 5. 考察

本調査の分析対象の新聞記事の内容を整理した結果から、SWは例えば学校では、親を含めた「環境」を重視していることが読み取れた。新聞記事で、家庭内の問題としては、なかなか解決に結びつきにくい経済的理由で、養育を放棄した親が生活保護などの福祉サービスを受けられるよう支援したり、学校での問題に親の虐待が関係しているかどうかの確認をしたりすることが取り上げられていた。そして、これらの対人援助を実践する際に、児童相談所、警察などの関係機関との連携を重視し、利用者本人を取り巻く環境の改善を目標としていることも見て取れた。

一方、CPは心的問題やストレスなどで悩む人々の様々な相談支援を実践し、利用者が自己の能力でいろいろな問題を解決できるように心理面でのケアを展開すると記事では述べられていた。

本調査の結果から、SW、CP両者とも、心の内面や不適応行動の改善に向けて、相談援助などの対人援助を実践すると、記事では述べられていることが認められた。CPが基本的には相談室など利用者が来室して、対人援助を実践する待ちの姿勢であるのに対し、SWは、社会的視点を重要視しアウトリーチなどを通して、社会生活上の環境の改善に力を入れる傾向にあることも読み取れた。